



Handwritten text on yellow label:
Theodor
18

中村俊定文庫
文庫 18
998





まのこころ

出陣最上
椽鼻二丘輯
男 羽人校

日映多年校

い	岸	上	の	時	や	一	吹	梅	の	風	送	流
蓬	菜	や	々	々	ハ	ハ	キ	キ	ノ	ノ	川	毛
あ	ら	ら	也	霧	送	の	も	と	う	け	こ	所
喰	積	や	山	乃	白	ひ	く	海	の	い	ろ	丘

屠三換とうろくやさきぬききんう

釈

心阿

門松や町並ふうり寺ハて

塞馬

は本の戸へ馬も引せを居まぬ

叢

てい絲いふりのまねか

松竹

草庵立書

苔の葉は為替と宿るさ

一月

咲かしてはくしてまぬ初美草

山人

あすのあまやに色う咲く初美草

岩榊
甘柿母

一人居り二人遊しそ母子仲良

下毛

鼠齋

ぬ十三の女と遊しては月もそや
小豆粥祝ふあまあうぬ

おの事あるおの者の名跡う

由哲

おの者もあま遊はるあうりうぬ

夷則

あま遊を待ハ末ぬ是れうし

弄化

初もや笑通しては筆字跡

郡山

一仙

年寄をさき實うや松の内

右橋

た居るも思の杉う松うち

栄人

とへねと摘ぐ菓は多く初め菓
 望ふうと母よる是勢の勢
 石雷くく朝は月ある子日うか
 唱らきやうよ七種並へまや
 紙燭して見えくまう佛の坐
 守くまの持束て見をりあまれさ
 青月や蘇打戸の明放し
 せうらや色てまのぬる茶摘
 方英 一具 蓬字 旭海 一葉 山外 最上

東老人賛

梅さきて菊は星のひうりうか
 正月ハ多て二月の梅れえ那
 梅さきて梅り見せらう庭台帝
 ろ車くくゆく梅の勢うり那
 うそくうあすはせりー梅色
 瓶ま甲たぬる水や梅のそま
 子との言よつまひたりうかのむ
 秋 宇阿 秋和 二丘 女仙 吹霞 茶花

出ぬくれはりと来たるや月の梅
遠くきく一軸いして萩の梅

洪石
在最上
川窓

雪のやうな海をく火のりぬる
うきひまやまふむ人の顔か

蒿原
羽人

黄もりのきくうみ海 の鳥集り子
黄鳥れ萩 祝きまらふまゝ

眞上
安土
鼎湖

庭空鳥雀噪

う醒つゝふ軒み何ふき雀け
蝶ふとをたて子を呼ぶ雀ふ

笠原
古原

題高家といふある人の宅にて

庭のうつふまふまふ乙をく
燕やつつ入たやう又身をかハ
まゆももさう一記層や烟や
何ひあて鳴や一日海雪や雀

鳥籠
茶山
多々
松島

十分も中軍着了
是他人園裏花

いさよもに草花をん藤小蝶

冥上夏
左河

蝶も葉のわびる朝夕五加木垣

怪草

およそつゝまを八身不き懐うを

西月

くも来き隣子まをゆき深き外

字阿

まゝのきを掃雪を二月月子

冥上
川太

旅人の石よりの虫月永うを

全
一石

幻住菴旧詠

権のよみ草花なみのみよ

一冬

さうきうらなり 詠みあり 藤のき

冥上
月夜

香やを此差おもあてつゝし

川朝

やあやまて 極て 来たり 土を中

欽哉

仏神のあはれの通してとくや思ひも
ようきとくを思ひ出す

涅槃會の珠投てねむやハ横山

二丘

やうきはうし 詠よあやぬを此山

碓嶺

またれあひ戸口みよし くるれ山

阜池

陸者よあくとむぬあり 是れ雨

眉山

よるの香まじりみちるしき

抱儀

はるまかぬるやまの月

卓他

ゆるいよきつらきまれつぎ

呂川

教と月や織り飼の香

曾多

上野は松の二百年もをき
老木のむらさきさよ

のく咲たり酒のあ
一本のむらさき

花の中みけりさきさき

大梅

陣とよ扇のくやらるさき

江戸 晋飛

瀬田橋上

とよ山も早や秋さきさき

紅葉

吹うの火をたひきさきの中

鳳那

森る事波をいさぎ次をさき

米沢 古砥

む房り霞のあもぬま務手

写秋

上野

うきくさくさむらさきゆる日さき

由松言

むの戸や森さきみ起てくる人

南函

長谷寺にて名と字をききやむのりき

久々

しもの身や又て火と焚くゆゑに

久見

長谷や山の僧をたふさく

もてこのまゝに形をたふさくよと

古歌

うやうやいふはふさくよとちの弦

うやうやいふはふさくよとちの弦

一々

黄

ふさくよとちの弦

黄山

もくしつふふふふふふ 紙巻

杜鰐

あまのこきこきこきこきこき

也 籠上

年々こきこきこきこきこき

安雅 越后

源氏の講

くくくくくくくくくくくく

如仙

くくくくくくくくくくくく

二丘

山吹やもももももももも

多美

椋洗の音にまわすく小糸を

東海 籠上

凍とけや雪のひの方へ枝のひく
 逸削
 久しや松のうらむもこれぞ
 西月
 常とゆあしんこちまき松のむ
 在^上松部
 鳴りとのこまのうもこ身果報
 千轆
 山平入やまこちれ砂の流るまこ
 ちうく
 ぬのさるるもや縁生れ杜の
 護物

反部

蒼あゆぬ紺とちりて 更衣
 史千
 久矣と哀た日よよこちりる衣
 大梅
 松よまは先まのこちりる衣
 二介

か中

孫ぬよや風さるる 松りや
 幻芝
 ちつうくと折目のしよー 袷子
 ちよめ
 おもひたき思ふよこちりる衣
 花露

卯月つる東都ありて

象佛そくやふ二を及こ

虚白

禁堂よりなりしは此を四月也

素柳

野亦罕人なり

さつとつりとり下草もまた牡丹うま

ふとめ

日時斗もてあそりやふたむけ

得燕

そく握し人跡みえりしは

仙臺 拳堂

坂中山王神事

々々井のりやまの権臣者

梅通

若菜わかし植ても畑の形

二丘

根りやまのつるあや桐の花

楓下

とまうるとみ起てる歌のみ

九起

知のやや日又候月ありし

若了

石山の茶店にて

川原の上よりりやま本立

方英

人來ぬハ鶴も花は本下園

江月

夢ちき此海の舟波わらぬふらら

米沢

左琴

舟の揺るふららうららうらら

辰白

尺ふきたる煙のあふららうらら

五後

嵐山の大慈園をこらうらら

帷子のけせやぬふららうらら

一色

二三寸のておし戸やまの秋

玄子

比上の匠やうららうらら

波同

るま風舟の子舟にるあは

眉山

遠むらうららうららうらら
時給旗さうららうららうらら

途ちうららうらら
あはれおと

陰まてし身はうららうらら

夷則

あはれおとけはうららうらら

古瑟

あはれおとけはうららうらら

也椎

あはれおとけはうららうらら

鳳朗

あはれおとけはうららうらら

仙沙

あはれおとけはうららうらら

了得

+

人間恩と管衆勢
ふ宛年命日夜去

黄らるのひめりを啼て老にきり

一具

冬いつい来て見ぬ軍をけり子

美の

うたふひのきよ神ありやけり子

逸例

芭蕉翁の百廿四品を引上て
法會のよまをり義仲さまは流る

はあう一の敷母をきれては流る

月獲

朝の曇やあり岸もめとりさん

吟案

横こみや曇えりてあふふふ

冬波

子の世は風と流しては流る

京上 雙溪

棹先へ来て見えくしぬ神

水戸 棕畝

世の中をせいくあふう 暢しよ

京上 二重

つくさ流ぬるハ志まつ折故うま

若非

三百得の入ともすして故きかみ

福を山 大費

明て稱く故は流るや故屋の内

鼎左

寐くよふつしを流故屋のきり

孫人

風多しけりなるも故きかみ

田園

七尾より

うらたねとあそぶあまのついで

梅室

経敷の跡に二階やまのし

米沢 鳳兮

みよよ此埃うまぬたひとて

照池

是か打らうの鳥よの目も

二丘

あや免昔月ハ云々しちうたき舞の
堂東ノ突ハし餘韻もはたて

怪子をよみてしうやをたひちりて

氷狐

萱のいろ見ると並ぶるあやめうま

礪山

七尾のあやめより

刈のこもあやめよあまの夕

由誓

あしりるあや津のまはつたのあま

壺乙

あまのまて唄よるる田植うら

采峰

あえとて唄のこもする田うら

岩城 尼橋

あまてめやせりていかにあまのあま

あま 貞松尼

あまのあやめよあまの夕

次峯

あまのあやめよあまの夕

英泉

眼とまよふや秋の風おち

御子 姫山

住吉津吏有院あり

浪連の風立や津雲の霞を吹かす

一省

流連未だいとこねる越一の勢半そ

糸籠 布席

浪うき——神や秋のこや付の

茂推

秋部

森とともや秋の山影と高きま

佛兄

故郷を出て故郷の喰事をまらさの秋

乙良

初秋や秋まうく見ゆ秋野の煙末

黄山

と川秋のあみ杖つくしつらうま

沙鷗

一抱とともり（今も天の川

玩南

須弥蒼海のいづこに何とぞ
つらまかんりしとより 抖擞の身
くあれは秋まらさのまらさ
まらさ 浄七三部妙典と一字一石

た出づして速健正見といひゆき
み

七夕や小石物ひみ七所川

一具

一白く老人の麻屋頂の思ひは石物
ひみあまの心をたましくして

世那みちうもきあぬや 神 机

釈
擔言月

かぬ〜

葉の葉の敷〜ねと神のま

永月

父みか〜ころ

新ち〜ふも〜ての月

二三

森やうとそ森〜のそいさ〜登の月

仙書
宗古

う〜道よら登〜のあゝおんれ月

二平

神父登〜のまな〜て出もと〜か

最上
つ〜四

捨子と誰もおも〜角力あ

最上
蓬陽

投ら〜て〜一〜え〜角力う形

最上
宇あ

伏見あて

〜こめもを棍〜く〜花火うぬ

有節

糸口の付てたゆまを細あらし

岱年

剃刀の礎よぬ日や秋の飛

心阿

木のゆれるお母さ日く秋は勢

草首

くく来て芙蓉の曙の暁の
くく来てとんやうたる寺の

まうこひをのほり
くくおきん

層花やふりきり了の上

滝女

うづや月おとく根を

井窓

むよは月のおよんはうる

最上
路名

二三日望よ居てうへるこるうれ

右橋

晴くお空垣とくまは秋の蝶

在雨

秋の蝶つあんとくう放しをア

朱沢
稲丸

橋よとくうとさるてもあ秋の蝶

仙臺
大阿

出る月と入日のるや赤塔冷

二丘

みもやうみおのるる日知あ

米沢
古表

くく此空上へんと
送うまのまき

うくやまー早稲の朝日と空の上

梅家女

祇柱のい糸もなれた林う那

岱年

赤き母伏て見るを稲穂、子
 才の囁しもせぬ又鬼灯、子
 子むくははとも淋し、唐うし
 世神又起さるやの安さ、肌
 船うぬみりしひ笑は隣、うな
 庭掃 下をといて芒さるも
 櫛らきたれと櫛て見る芒、うな
 何うもむしめ船く桔梗、あゝ
 最上 末六
 米沢 一約
 米沢 蒼札
 米沢 杜橋
 言上 呉秋
 米沢 貝砂
 米沢 如仙
 米沢 宇逸

酒のうとくさるる赤や女郎を
 志うやくのまゝておきけめ、うな
 狼のうよふくまやとく船、うな
 日あり見て鐘つもみ知る木槿、うな
 志まの坂ありて
 秋きく——言どつらるも海、うな
 赤や船よふさきもうて秋、うな
 船きやころけまの庭、うな
 一尚
 大翠
 有方
 九尋
 桐堂
 洗家
 東里

文部省

のきてしるくちのくくや秋をく

水狐

之冊の三七百六

柱さくしれくひまき 秋をく

雀雙

飼まの鳴合をきりきりくき

鳥頃

霧とものにまをくゆき 雲うを

嵐外

くちりのゆてふり 物の旁

一飛

ようさの雀はえや 放生會

南溪

初ゆみ鳴の飛く川筋道し

斗玉

啼虫又おひのまるけち外

茶三

虫の音やいつかのひるまけ蔓

白川
山雄

金鳴やおさまの時の身れさんけ

最上
川丈

ひー啼てけけみせし 雁あを

いそあ

お新柳うちのささる毫了れ

在最上
嘯誌

このまに鳴まを待てやみ きり

室上
稻海

隣の小隣てきくやまらなくを

而右

浪きも折廻ひ浪平の碇なる

出雲
完結

何れとも見えざる光りくや
さうりやち出て無き向はま

晴よきや朝うらけし月のそら

ふ転

侍宵や細おらうの世乃と子

永月

めてさうり月見る人みそいさ

二丘

名月や我名を砂み書持ぬ

吟霞

二投 泉良歌

湯の山やうけのこえて月も

冬をめ

名月や影うらむても雪か

予阿

名月や影てまこわぬ川原居

甫田

星もさやうらうらやま此月

斗南

川上へさのほりきる月此雪

久し

けぬけて後みそく月の雪

悠々

舟けさ月の光りやまよれや

黄山

くまふくてと巻あやし月のみ

梅室

そと烟や雪の上よる月をさ

仙鶴

三百丹とまてきまのつくやまのり

米沢

朶峯

障る子又何そ持しし落しし

朶岳

月とせはさぐぬやみ 秋乃星

天由

台あけて何見る、みそ秋のくれ

二丘

石神の窓は日と来ておよ
子のいとやとくらんか

葉の葉は種文出て祝ひを

一具

其怪文曰獲其福德度世上天

まのいつのくししやまのまののち

得葺

高しうあよおまのりまのの勾ひま

其山

祝ひのとやくのまて葉のとな

古嶽

る戸まきと出院やまのよまのりし

岩上

千城

鞠子のくみは漢にきて葉をさ
よのの雨さたのしむ

とけてあまそのまのの葉うか

卓池

愛の草しよのみちしとまの洞の中

波文

と庭にめむま金山のれ葉うな

佳年

るのくも波度度身とそとそとぬ

行脚

兼年

香梅の白と赤くくう 詩吟也
 田とあけつて 穀子かしくる九月也
 の秋や 靨よささるもの 借や 兼
 一とれたるもの 一とれたるもの 九月也
 米沢 観素
 最上 系鹿
 最上 林曹
 崇仙

みどり

一森内をともくくれのりりり
 小敷くくれば ぬい森余る斗り
 とほたつもの 花入るくくれば
 折くる枝よ 一葉の時るうな
 史子
 須賀川 清民
 大梅

二妙庵 采女
 更る夜や 茶をの 香も一時も
 春のむかひ 入るもの 花も一時
 風朗

鳥も掃除はまれと神のあや
 翔るよりのまくくもくもく
 吹くよりの葉よ更りきり
 今掃このまき一庭こみ掃
 物もまきも消ても葉のまき
 石楠もを掃くよくまき
 森ふよまぬくよしてまき
 葉やかく二十三物の氣は
 在雨

擔月

念く

最上
芦窓

米沢
蕉翠

大梅

岱雪

在雨

流の川末の庄

末の川のついでに
 葉を
 掃除
 此
 戸を
 吹
 中
 ねん
 驛
 鳥
 仙

抱磯

流海

米沢
葉村

流芝

茶路

玄子

斗逆

さういふよめして仕ぬぬりうら

濱吉

紫薫香

そのこつとてい原よふりてゆ木の白ひ

一具

日の出る時半仕うきてみるさや

二丘

森入るの思ふ折あり みるさや

予童

米隣り新室か招うれて信る

はさこさしーいなるまへとーやむ

一おさひらもくうてみるあのみ

申誓

凶賊よ持子を 松ひのまこ

泣あはまこの持子う冬れ月

二丘

毛月能くもを持り牛の角

呉秋

4月月の薄い敷り辛さる

まの

やと引乃津うき記めんか

雙侯

用名の水くくや花の鏡

馬堂

顔見をや庭木のまると余かまう

味令

三白月の一照りあられうま

小柯

冥着島のくく信居よ

をむと近へく

よの節、正た日あり休格子
梅のと那人よ先よ冬むらま
大梅 吟霞

赤湯偶成

初雪や湯毒拂ひのまじりて
ゆよにま甲うてりある面白
山麓をこの雪こほりなるま
麻のありをせぬよたつてや坂の雪
人魚の雪よ成きや市井を
尊阿 大梅 史子 貞祇 由誓

とく居れす一節やうされ雪
枝修く船燈あけや雪りし
丁知 本屑

雲駛月運舟行岸移

あ上うくさうま甲字森を
水もや多きをさきして山のを
る後る千作や月よ峰よを
煤掃て正た日ありのまじり
茶の下、菓子にお焚火やと掃
木本 旭海 英父丸 助室 節之

以年やとまの佳の逢う来る

古人 吟言

ゆくの神創たる新りな

古海

年用急いろと留してきま

白三

只新梅を祈人

はくのとてと年もよく老をぬ

一具

七夕や隣 のおれ甲 仕ま

むくりよとまの草花糸の露

一具

地く流りおるみ湫の流るけ

本月

町の便りみとく厚紙

夷則

ちくのるよ戸口の凍りこをま

具

才子の大工も印をうあま

丘

粕汁も喰ぬつり白の乾くをみ
長智をそ例とよハ寸亦宿
ぬーのふいふみて毎日奉
は坐拂を皆さくかた
せ例くのは代もて婦の所異
針落しても尺ゆる白もさお
とそ月の物をさくくみ麻さへて
ととくやゆる所の割出

則 月 丘 具 則 月 具 丘 具 則

つり柿も粉をふくまはさみか
吹くもさるふりえつらぬ風名
花亦み乾くぬ乾の戸亦は
繪ふも房りとら者さくせま
風の系れも子供を祿めまり
かきもくふけぬさー川
五つは便ふくくみ井植て
三つは仕りみ井戸を浚ん

則 月 丘 具 則 月 具 丘 具 則

三

尚ほをきめて娘の隙をとと

さひ先のうぶ帯のきりぎり

石碁の印しりりくくたるる

賤布きりりし神島花町

川あふ二日かきし連城あたら

湯をきりりるよきし昇る月

みきやう子精気柳のあきらつを

角力うれの吐きりりる

則

月

丘

具

月

鳥

冬

紅

あつころのゆきんてふるまきさし

日のくまきし仕区飴菓子

ちよくくみきし切きよぶ帯

鏡と折あなのうきし乾ぬ

あつころのゆきんてふるまきさし

乙切草のきりりちよ下

鳥

月

丘

冬

月

鳥

二丘

一具

禾月

夷見

各九句

神皇のしつとやちかされ
し立石ちよは清く

一句

新あふちやあまの秋の風

旅のこほみまは穂芒 二丘

昔の海國を旅路の備えて 禾月

仰み遊をふをまもる 操舟

さたをたれ猶とらもまひ娘 夷見

本峯の梅の白ふけの道 句

塙の係より...
 いちこみ...
 あつし...
 息柵の...
 格より...
 た...
 板の...
 め...

月 丘 果 刈 檜 月 檜 月

越後...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

具 丘 月 檜 月

一具

二魚

禾月

檜月

夾則各七句

執心半 一句

一具

名月や細の少包み人の志

遠くのものみわいのぬや

下段の毛附み侍より

菫漬のつらのえんま

都合をくはし拂しお

まへに掃くも夜のちる

禾月

二魚

具

月

立

此頃の百廿三日は神楽部を
 年々おのわさぬおのつし時
 おつしをいふにふりけり
 本戸を越さぬ湯も入ぬ
 とうあふすけいさせおのつ
 人はあつし持まさひる
 とうあふすけいさせおのつ
 けりおのつしの中の様
 けりおのつしの中の様

月 具 丘 月 具 丘 月 具

市らくぬ米のさる内吹て
 なつしおのつしの中
 善いおのつしの中
 うつしおのつしの中
 後まつしおのつしの中
 けりおのつしの中
 けりおのつしの中
 けりおのつしの中

月 具 丘 月 具 丘 月 具

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二

十一

一具
未月
二丘
各十二句

